



主な内容

- 特集—— 3.11から8年 心の復興に向けた地域医療連携づくり
- 移転事業情報— 矢巾新病院と内丸メディカルセンターの診療体制について
- トピックス— 平成30年度卒業式が行われました
- フリーページ— 岩手医科大学附属花巻温泉病院の歩み

表紙写真：附属病院移転に伴う診療体制についての記者発表会（関連記事P6-7,8）

3.11 から 8年 心の復興に向けた地域医療連携づくり

東日本大震災津波から8年が経過し、心の復興に向けた様々な地域医療連携づくりが進んでいます。今回の特集では、本学が岩手県より委託を受け運営する2つのセンター「岩手県こころのケアセンター」と「いわてこどもケアセンター」の取り組みを紹介します。

1. 岩手県こころのケアセンター運営事業

当センターは東日本大震災津波で辛い経験をされたことにより、精神的負担を抱えている被災者の心身の健康を守るため、きめ細やかで専門的なこころのケアを長期にわたり実施することを目的として平成24年に開設されました。継続して中長期的にこころのケアを推進するため、全県の中核となる「岩手県こころのケアセンター」を本学に設置するとともに、沿岸4地域には地域におけるこころのケアを推進する「地域こころのケアセンター」を設置し、酒井明夫センター長の指揮のもと、スタッフが一丸となってこころのケア活動を行っています。

◆ 主な事業内容

こころのケアセンターでは被災地のメンタルヘルス対策として、市町村等の地域保健活動と連携しながら、こころの健康づくり事業による普及啓発活動（写真1）や人材養成事業を行っています（写真2）。そして、被災者やその周囲への個別支援として、市町村等と連携して訪問活動や震災こころの相談室による個別相談を行っています（写真3）。また、行政職員等の被災地の勤労者へのメンタルヘルス対策を実施しています（写真4）。



（写真1）住民への啓発活動



（写真2）人材養成事業



（写真3）震災こころの相談室



（写真4）被災地勤労者への健康相談

このような包括的な地域へのメンタルヘルス対策は、以前より本学が主体的に関わってきた「(自殺対策のための戦略研究) 複合的自殺対策プログラムの自殺企図予防効果に関する地域介入研究 (NOCOMIT-J)」による国際的なエビデンスを拡張させたものであり^{*}、震災後の沿岸地域は自殺リスクが高いにも関わらず減少傾向を認めるなど、対策が奏功していると考えられます。

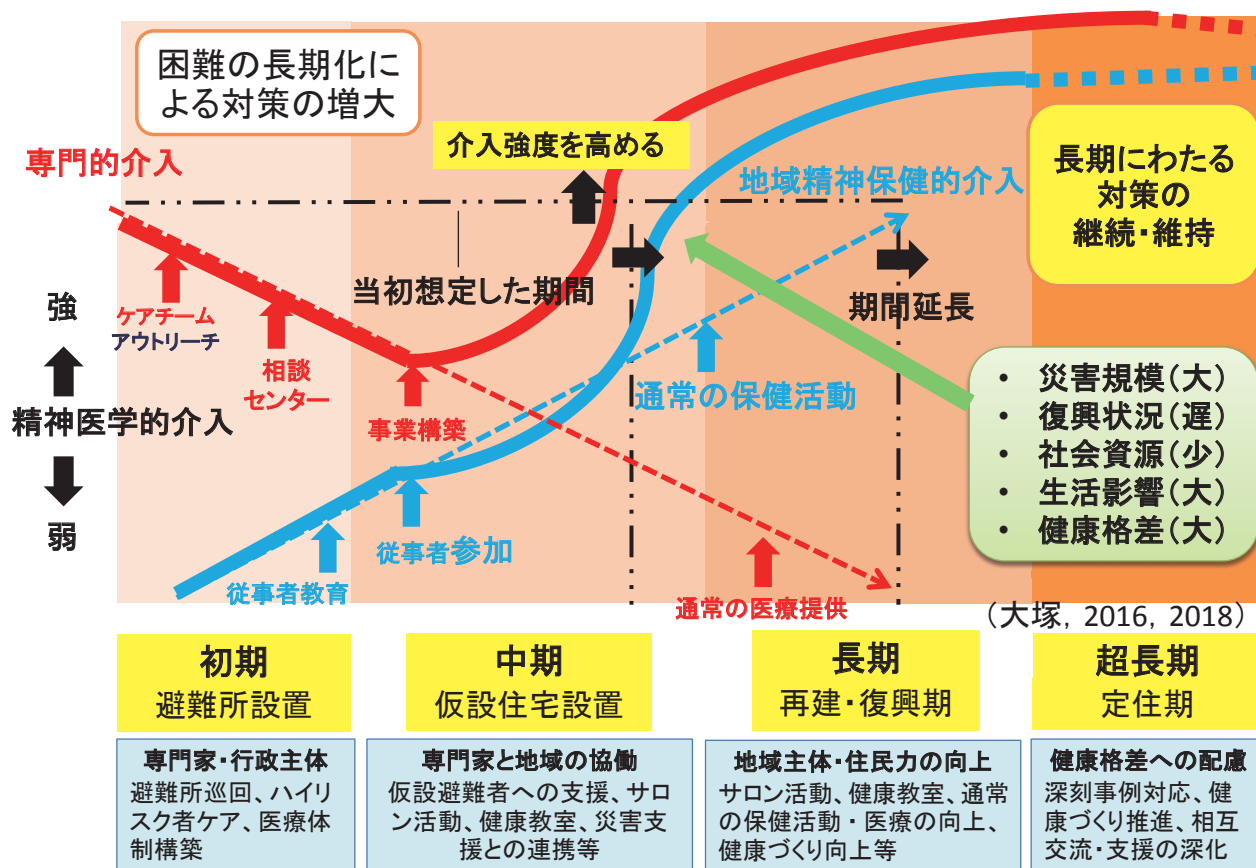
^{*} Ono Y, Sakai A, Otsuka K., et al., PLoS ONE 2013;8:e74902.doi 10.1371/journal.pone.0074902

◆ 最近の取り組み

東日本大震災津波では、仮設住居からの移動や当初見込んでいた復興への期間が延長するなど、被災者は持続的なストレスにさらされています。そして、今後も仮設住居から復興住宅等への移動や医療費の自己負担、経済的自立、世帯収入減少、そして、ローンの支払い猶予期間が終了する等、被災者を取り巻いている状況は厳しくなっていくことが想定されています。

このように被災者の現実の生活は、様々な困難を抱え問題も長期化しています。加えて、被災地で働く自治体職員や復興関連業務従事者、対人援助職等の勤労者のストレス加重も継続しています。今後、被災地域では地域との結びつきの希薄さや孤独等により、インフラが整備された後もメンタルヘルス上の問題が様々起きることが想定されています。これらの問題は今後、被災地の復興、そして住民の定住に向けて、解決しなければなりません。

一方、復興ステージと被災者のメンタルヘルス状況を踏まえて、対策の方法論を開発・実践する必要があるため、地元保健師等のみでは対応が困難で、支援を継続していく必要があります。大規模災害の被災地は長期的にこころの健康および自殺のリスクにさらされており、介入を弱めれば危険性が高まるため、長期的で高い強度のメンタルヘルス対策の実践が求められています(下図)。岩手県の保健医療計画や、平成30年度に策定される次期の復興プラン等でもこころのケアは重要課題ととらえられています。「力を厚生済民に尽くす」という本学の建学の精神のもと、岩手県こころのケアセンターではスタッフ一同、被災地のこころの健康を守る一助となるべくこれからも活動を一生懸命行っていきます。



こころのケアの中長期的モデル

◆ 連携づくりへ一言

矢巾への附属病院移転に伴い、精神科急性期治療病棟と児童・思春期精神科病棟が新設されます。精神科医療として専門医療のみならず、専門医の育成や医学教育に取り組み、こころのケアセンターの活動と連携していきます。岩手県は精神科医療や精神保健の普及や推進が従来から課題となっていますので、更なる医療復興に寄与していきたいと思ひます。

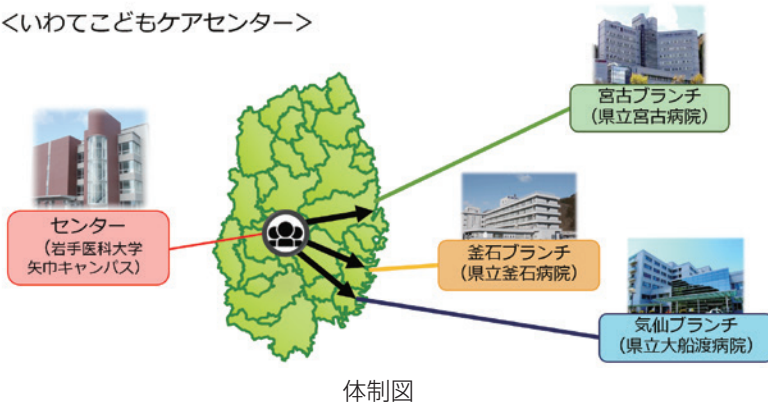
(副センター長 大塚 耕太郎)

2. いわてこどもケアセンター運営事業

当センターは震災関連のトラウマスティックストレスや子どもたちのこころの問題全般に対する専門的な診療施設として、平成25年5月に矢巾キャンパスに開設しました。震災関連の様々なこころの症状や、子どもたちのこころの問題全般について医療的な支援を行っています。

◆巡回診療の取り組み

＜いわてこどもケアセンター＞

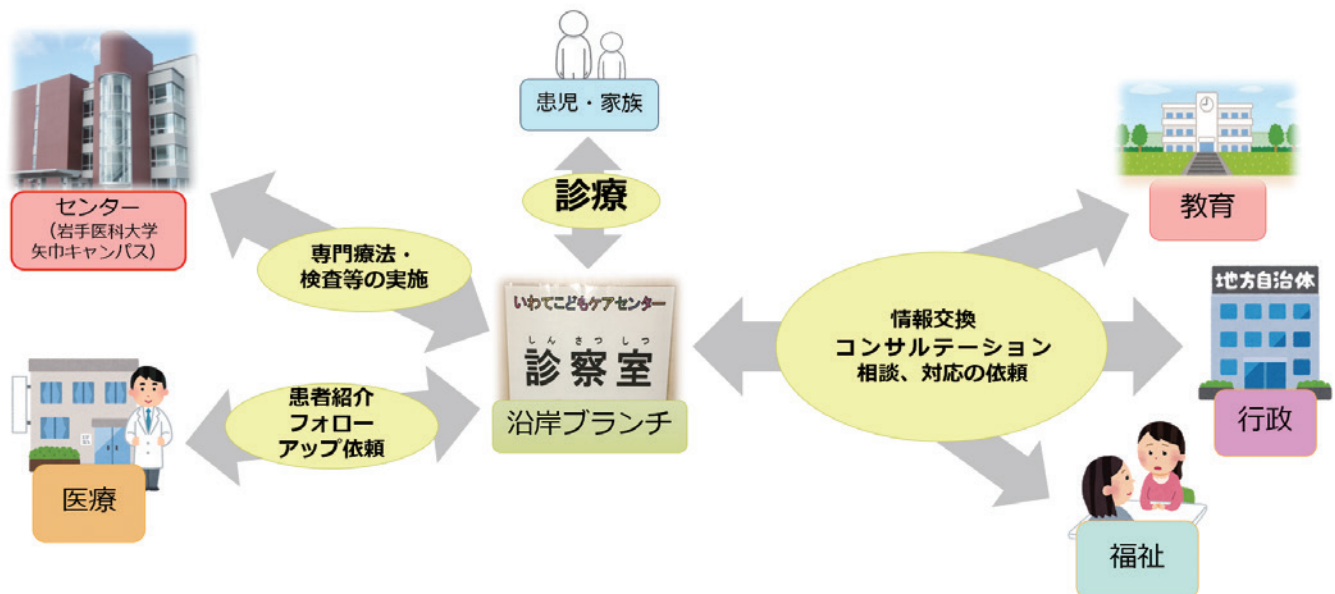


いわてこどもケアセンターでは、東日本大震災発災後から岩手県が設置運営した3つの「子どもの心のケアセンター」での相談支援・診療事業を引き継ぎ、宮古・釜石・気仙の沿岸3地区で巡回診療を継続実施しています。

巡回診療では、児童精神科医・看護師・臨床心理士・精神保健福祉士等からなる専門職チームが現地へ出向き、各沿岸3地区の県立病院の一面をお借りして週1回児童精神科診療を行っています。

沿岸地域における関係機関との連携について

受診児の在籍する学校の教員・スクールカウンセラーなどの教育関係機関、相談支援事業所・放課後児童デイサービス・発達障害相談支援機関・市町村担当課や児童相談所といった地域の関係機関と連携を図り、子どもとその家族を支えるために、協働で支援・治療に当たっています。また地域の小児科や精神科医療機関との連携協力により、専門治療の提供やその後のフォローアップ体制の構築などに努めています。



巡回診療の現状と今後の展望について

当センターの開設から年を追うごとに延受診件数は増加傾向にあります。また、新規受診希望者も減ることはなく、初診までの待機期間が延びる傾向が続いています。沿岸地区での児童精神科医療に対するニーズは、年々多様化し増加していますが、内陸部に比べて、子どもの「こころのケア」を担う医療・福祉等の資源が非常に限られています。その中で、当センターの巡回診療が果たす役割は今後ますます大きくなっていくものと考えられます。沿岸地区において児童精神科医を中心とした専門性の高い診療の提供を継続すること、そのための安定的な仕組みを構築することが重要です。

また、こころのケアは医療機関のみで行うものではなく、教育・保健福祉・地域の方々との多層的な連携・協働なくして成し得ることはできません。そのためのネットワークをより一層強化していくことが望まれます。

◆ 東日本大震災後に誕生した子どもとその家庭への縦断的支援研究

「東日本大震災後に誕生した子どもとその家庭への縦断的支援研究」(愛称:みちのくこどもコホート)は、岩手、宮城、福島沿岸地域にお住まいのお子さんと保護者さんを対象に、3県合同チームで調査・研究・支援を行うものです。東日本大震災を直接体験してなくても、混乱期に乳児期を過ごすという体験が、子どもの心の発達や親の精神衛生にどのような影響を及ぼし、どんな課題が顕れてくるのかを明らかにする「前向きコホート研究」です。データ収集だけでなく、支援を要する子どもや保護者を早期に発見し、適切な介入を行うという点もこの研究の特徴の一つです。

研究は3年目を迎えましたが、長期に渡りストレス状況下で生活することの様々な影響が子どもや保護者に出ていることがわかってきました。また、適切な支援の提供や見守り体制の構築により、回復し大きく改善していく子どもたちが少なくないことも、調査結果から明らかになり、関係者一同、確かな手ごたえを感じています。地域の学校や関係機関とも連携しながら、長期的にこの研究と被災地域へのサポートを継続していく必要があると考えています。



みちのくこどもコホートのホームページ
(<http://www.miccageje.org/>)

◆ 連携づくりへ一言

大震災から8年が経過してもなお、被災地での診療や研究を通じて、不安や悲しみを抱えて苦悩する子どもとその家族との出会いが続いています。いわてこどもケアセンターでは、子どものトラウマに特化した治療法である「トラウマフォーカスト認知行動療法(TF-CBT)」などの専門療法の提供から「みちのくこどもコホート」での地域支援活動まで、多層的で包括的な介入支援・診療に取り組んでいます。大震災を契機とした子どもの様々な心理的反応に長期的に対処していくために、「トラウマインフォームドケア(TIC)」の視点を持ち、トラウマ体験がその人の生涯にわたり心身の状態に影響を及ぼすことを学び、理解を深め、子どもに関わる全ての支援者が共通認識をもってトラウマケアに取り組むことを目指しています。

今年の9月の附属病院移転に伴い、児童精神科病棟が開設されます。岩手県全域の子どもとその家族の幅広い児童精神科診療ニーズに応えられるよう、関係各所のスタッフ一同、一丸となって前進していきたいと存じます。

(副センター長 八木 淳子)



お知らせ

事務局組織改編について

■ 平成31年4月1日から、同年9月の附属病院移転を見据え下記のとおり事務局組織改編を行います。

変更後

● 部の改編

法人事務部

● 課(事務室)の改編

(法人事務部)	総務課
---------	-----

(学務部)	全学教育企画課
	薬学部教務課
	看護学部教務課
	いわて東北メディカル・メガバンク事務室

変更前

企画部
総務部
財務部

(総務部)	庶務課
	健康管理センター事務室

(学務部)	矢巾キャンパス教務課
-------	------------

いわて東北メディカル・メガバンク事務室

矢中新病院と内丸メディカルセンターの診療体制について

矢中新病院の建設工事は着々と進んでおり、本年6月末に竣工し、9月21日に矢中新病院と内丸メディカルセンターが同時に開院します。本稿では9月21日以降の診療体制について紹介します。

病院移転の概要について

矢中新病院は、手術・入院を中心とした高度治療機能病院、内丸メディカルセンターは、迅速な検査、診断を行う高度外来機能病院として、相互に密接な連携を図り、一体的な運用体制を構築します。また、矢中新病院は、県内唯一の特定機能病院として高度医療提供の役割を担うと共に、高度救命救急センター、総合周産期母子医療センター、小児医療等の機能の拡充や重症系病床の増床、緩和ケア病棟や回復期リハビリテーション病棟等の新設を行い、より高度で先進的な医療体制を構築します。

矢中新病院

▶ 病床数：1,000 床（一般病床：932 床、精神病床：68 床）

【一般病床区分】高度急性期：862 床 回復期：45 床 慢性期：25 床

▶ 手術室数：20 室

▶ 主な医療機関指定

- ・ 特定機能病院 ・ 高度救命救急センター ・ 災害拠点病院
- ・ 総合周産期母子医療センター ・ 特定入院料病棟
- ・ 都道府県がん診療連携拠点病院 ・ 臨床研修指定病院 等



救命救急入院料病棟	20 床	ハイケアユニット ^{注2} 新設予定	26 床
新生児集中治療室	24 床	回復期リハビリテーション病棟 ^{注3} 新設予定	45 床
脳卒中ケアユニット ^{注1} 新設予定	6 床	母体・胎児集中治療室	9 床
新生児治療回復室	14 床	緩和ケア病棟 ^{注4} 新設予定	25 床
特定集中治療室	24 床	精神科急性期治療病棟 ^{注5} 新設予定	50 床
小児入院医療管理料病棟	58 床	児童・思春期精神科病棟 ^{注6} 新設予定	18 床

注1 脳卒中ケアユニット：急性期の脳血管障害（脳梗塞・脳出血・くも膜下出血など）の患者さんを受け入れる専用の病床です。脳卒中の専門知識を持つ経験豊富な医師、看護師、リハビリテーション技師らの専門チームにより、脳卒中を発症早期から24時間体制で集中的に治療を行います。

注2 ハイケアユニット：診療科を問わず重症度が高く、高度な治療や看護ケア・処置が必要な患者さんや全身麻酔下での大手術後の術後管理が必要な患者さんを受け入れる病床です。

注3 回復期リハビリテーション病棟：脳卒中または骨折などの病気で急性期を脱しても、まだ医学的・社会的・心理的なサポートが必要な患者さんを対象とした病棟です。多くの専門職種がチームを組んで集中的なりハビリテーションを実施します。

注4 緩和ケア病棟：緩和ケアを専門的に提供する病棟です。この病棟は、一般病棟や在宅ケアでは対応困難な心身の苦痛がある患者さんへの対応や、人生の最期の時期を穏やかに迎えることを目的としています。

注5 精神科急性期治療病棟：急性期の精神疾患に関するケアを行います。患者さんの状態に合わせて、多職種連携により急性期の症状の把握や対応、コンサルテーション、リエゾン精神医療を提供し、地域連携によるコミュニティケアへの導入を行います。

注6 児童・思春期精神科病棟：3歳から16歳未満の子どもの、こころや行動の問題全般を対象として診療する病棟です。ご家族や学校・地域のかかりつけ医の先生方と連携を取りながら問題解決のための診療を行います。

内丸メディカルセンター

▶ 当面は既存施設を利用
（将来的に新棟建設予定）

▶ 病床数：50 床（一般、急性期）

▶ 主な放射線関係装置

- ・ CT装置 4 台
- ・ MRI装置 4 台
- ・ 心臓カテーテル装置 1 台



矢中新病院開院時の外来診療体制について

矢中新病院

- ・特定の診療科と特殊検査が必要な患者さん、入院中の患者さんの院内紹介の診療を行います。
- ・完全予約制の病院となりますので、受診を希望される場合は事前にお問い合わせ下さい。
- ・受診の際は紹介状が必要となります。紹介状の内容に応じて、内丸メディカルセンターへご案内する場合があります。

矢中新病院の外来対応診療科

- | | | | |
|----------|---------|---------|-------------|
| ・血液・腫瘍内科 | ・産婦人科 | ・小児外科 | ・放射線治療科 |
| ・呼吸器外科 | ・放射線診断科 | ・心臓血管外科 | ・精神科 |
| ・形成外科 | ・救急科 | ・美容外科 | ・病理診断科 |
| ・頭頸部外科 | ・緩和ケア内科 | ・小児科 | ・リハビリテーション科 |

※がん化学療法関係の診療は上記以外の診療科も含め矢巾でのみ対応

内丸メディカルセンター

- ・矢巾でのみ診療を行う特定の診療科、特殊検査を除き、原則として現状どおりの診療体制を維持します。
- ・高度診断機器を充実させ、より迅速な検査・診断体制を構築します。
- ・紹介状の有無に関わらず受診が可能となります。

内丸メディカルセンターの外来対応診療科

- | | | | |
|--------|-----------|-----------|---------|
| ・内科 | ・気管食道外科 | ・糖尿病・代謝内科 | ・リウマチ科 |
| ・肝臓内科 | ・整形外科 | ・内分泌内科 | ・耳鼻咽喉科 |
| ・循環器内科 | ・婦人科 | ・呼吸器内科 | ・皮膚科 |
| ・腎臓内科 | (生殖医療を実施) | ・アレルギー科 | ・麻酔科 |
| ・心療内科 | ・眼科 | ・老年内科 | ・歯科 |
| ・神経内科 | ・泌尿器科 | ・消化器外科 | ・矯正歯科 |
| ・外科 | ・臨床検査科 | ・乳腺外科 | ・小児歯科 |
| ・肝臓外科 | ・消化器内科 | ・脳神経外科 | ・歯科口腔外科 |

※当該体制は新病院開院時の混乱を最小限にするための体制であり、開院後の状況に応じて柔軟に対応する予定です。

救急医療体制について

矢中新病院

- ・常時（24時間365日）1次・2次・3次救急全てに対応します。
- ・受診された方は、医療費等に加えて、時間外選定療養費を負担いただく場合があります。

内丸メディカルセンター

- ・1次救急医療の対応を行います。受付時間：17時～21時（土日祝祭日を除く平日のみ）
- ・救急車の受入及び小児救急、精神科救急、お産は全て矢中新病院での対応となります。

診療体制に関する詳細は、岩手医科大学附属病院ホームページ（<http://www.iwate-med.ac.jp/hospital/news/iten-shinryoutaisei/>）に掲載しておりますのでご覧ください。

本学附属病院の矢巾町移転に伴う診療体制が公表されました

2月8日（金）、創立60周年記念館10階会議室において、本年9月に開院する矢巾新病院と内丸メディカルセンターの診療体制に関する記者発表会が行われました。

当日は小笠原邦昭附属病院長より、両病院の機能や外来診療・救急医療体制等について説明がありました。



また、2月12日（火）、歯学部4階講堂において、本学教職員を対象とした診療体制等に関する学内説明会が行われ、附属病院の医療スタッフを中心に約400名が集まりました。小笠原附属病院長は「教職員一同、力を合わせて新病院の診療体制を築き上げたい」と述べました。（※関連記事6-7ページ）



最終講義が行われました

2月26日（火）、歯学部4階講堂において、3月31日をもって定年退職される医・歯学部教授の最終講義が行われました。

本学教職員をはじめ、在学生や卒業生など多数の関係者は、各教授によるスライドや在職中のエピソードなどを交えた熱心な講義に耳を傾け、名残を惜しみました。講義終了後には、職員や学生から各教授に花束が贈呈され、惜しめない拍手が送られました。

講義内容

「異常形態から学ぶこと」

解剖学講座機能形態学分野

藤村 朗 教授



「Dynamic Morphology 見果てぬ夢」

医学教育学講座

佐藤 洋一 教授



「神経学に魅せられて

—Physician Scientistとしての40年—

内科学講座神経内科・老年科分野

寺山 靖夫 教授



「デジタル画像データによる 画像診断の発展と課題」

放射線医学講座

江原 茂 教授



「前立腺癌放射線治療の取り組み」

放射線医学講座

中村 隆二 教授



左から：藤村教授、佐藤教授、寺山教授、江原教授、中村教授

薬学部企業研究セミナーが行われました

3月2日（土）、矢巾キャンパス東研究棟1階SGL教室において、薬学部学生を対象とした学内企業研究セミナーが行われました。

本格的な就職活動時期を迎える薬学生への就職支援の最大イベントとして、官公庁・医薬品メーカー・ドラッグストア・医療機関など、全100事業所の人事採用担当者を招き、会社概要や採用情報を提供していただきました。

また、60名以上の本学卒業生が採用担当者とともに来校したことから、先輩の生の声を聞く貴重な機会となりました。



事前説明を受ける学生



岩手医科大学附属病院の説明会場



県内病院の説明会場

平成30年度卒業式が行われました

平成30年度岩手医科大学・岩手看護短期大学合同卒業式は、3月8日（金）に岩手県民会館大ホールにおいて厳かに挙行され、本法人役員や教職員をはじめ、多数のご父母が出席されました。

今年度の岩手医科大学卒業生は、大学院医学研究科博士課程7名、医学研究科修士課程8名、歯学研究科博士課程2名、薬学研究科博士課程2名、医学部133名、歯学部47名、薬学部83名、岩手看護短期大学卒業生は、専攻科地域看護学専攻22名、助産学専攻14名、看護学科63名でした。

また、岩手医科大学医療専門学校の卒業式は、3月12日（火）に歯学部4階講堂で行われ、歯科技工学科8名、歯科衛生学科31名の卒業生を送り出しました。

■岩手医科大学・岩手看護短期大学合同卒業式



■岩手医科大学医療専門学校卒業式



「NICUにおけるグリーフケア」

グリーフケアとは「グリーフワーク（大きな悲しみを受けた人が辿らなければならないこと。死を受け入れることもそのひとつ。）のプロセスを支えて見守ること、人が正常なグリーフワークを歩めるようにサポートすること」とされています。

NICU 看護師 工藤 尚子

NICU（新生児集中治療室）は、低出生体重児（未熟児）や、先天性の病気を持った重症新生児に対し、呼吸や循環機能の管理といった専門医療を24時間体制で提供する病床です。日本の新生児死亡率の低さは世界的にトップレベルにあり、当院のNICUもその一翼を担っておりますが、実際には救うことのできない命があるのもまた事実です。

私がグリーフケアの活動を始めたきっかけは、10年以上前に参加した「ちいさなお星さまの会（流産・死産・新生児死亡を経験された家族の自助グループ）」でした。当時、そこで母親たちから語られた「無神経な言動でこんな嫌な思いをした」「辛くて、苦しくて・・・でも誰にも話せなくて」「今でも病院の近くを通りたくない」など悲痛な思いに触れ、ケアが待ち望まれていることを知りました。

そこで平成20年に有志5人でグリーフケアの係を立ち上げました。主な活動内容としてはご家族のケア、勉強会の企画、スタッフ間の情報共有です。独自の「看取り用紙」を作成し、看取ったスタッフにはその時の家族の様子やケアで困ったこと、良かったこと、皆に伝えたいことなどを記入してもらい、ボードに貼り出してその場にいなかった人達も共有できるようにしました。また、手続きに関すること、ケアに関すること、気持ちの変化に関することなど5種類のパンフレットを作成し、ご家族にとって必要な情報を必要なタイミングで渡せるようにしました。他にもご家族に手紙を送ったり、ご家族に寄り添う医療スタッフの心のケアをするデスカンファレンスを実施しています。



ご家族から届いたお手紙

次はNICUのある岩手医大で産みたい」と言ってくださったり。なかには次子が生まれた報告を兼ねて会いに来てくれる方もいらっしゃいます。

亡くなった小さな命は、時に残された家族に大きな影を落とします。グリーフワークが上手くいかなかった時、両親の受け止め方の違いから生じる深く大きな溝は家族を壊したり、母親は「自分のせい」と悲しみの中で自分を追い詰め、体の不調から次子を考えることができなくなったり、仮に授かっても、気持ちが不安定なまま上手く子育てすることができず、虐待や母子心中へ繋がるケースも報告されています。そのような悲劇をひとつでも防ぐために、命を救うことが使命のNICUにあっても、私はグリーフケアも大切なケアだと考えています。

この10年間で当院のNICUのケアは着実に変わってきていると感じています。今後は、次のステップとしてNICU卒業生の家族会（自助グループ）も視野に入れて活動を続けていきたいと思っています。



当院NICUの看護師が作成したパンフレット

ご家族からは様々な形で労いの言葉をいただいています。「赤ちゃんのことを覚えてくれているのがうれしい」「退院しても自分達のことを気にかけてもらってありがたい」などのお礼の手紙をいただいたり、「しっかり向き合ってくれてありがとう、



神奈川県自助グループからいただいた洋服（小さくて市販されていないため手づくり）

医師卒業臨床研修センター事務室は、医学部卒業後の臨床研修に関する事務を担当しています。研修医の募集、勤怠管理、各種行事の運営、県内外の協力病院との研修調整など、日夜、研修医のサポートに当たっています。初期臨床研修医は、医師免許取得後2年の研修期間を当センターに所属し、厚生労働省が定めた研修目標を達成すべく、木の花会館3階の研修医室を拠点に日々研鑽を積んでいます。研修医室に隣接している事務室のスタッフ6名は、現在所属する33名の初期研修医の研修生活全般をバックアップしています。

また、後期研修医（専攻医・専門研修医）については、新しい専門医制度に係る業務や、初期研修医からの円滑な移行、高度専門医療の修得など、キャリアパスに係る支援も行っています。今後も学内各部署にご協力いただきながら、臨床研修のより一層の充実に向けて職員一丸となって取り組んで参ります。

(室長 山本 英子)



理事会報告 (1月定例ー1月28日開催)

1. 名誉教授の称号授与について
佐藤 洋一 (医学教育学講座医学教育学分野教授)
江原 茂 (放射線医学講座教授)
(称号授与年月日 平成31年4月1日付)
2. 附属病院移転に係る資金借入について
3. 役職者の選任について
副学長 三浦 廣行 (再任)
医学部長 佐々木 真理 (新任)
歯学部長 三浦 廣行 (再任)
健康管理センター長 石垣 泰 (再任)
(任期 三浦副学長、歯学部長については、平成31年4月1日から1年間、医学部長、健康管理センター長については、平成31年4月1日から3年間)
4. 教員の人事について
歯学部 補綴・インプラント学講座補綴・インプラント学分野 特任教授
鬼原 英道 (前 同分野 准教授)
医学部 外科学講座 准教授
大塚 幸喜 (前 同分野 特任准教授)
医学部 外科学講座 准教授
新田 浩幸 (前 同分野 特任准教授)
歯学部 補綴・インプラント学講座補綴・インプラント学分野 准教授
小林 琢也 (前 同分野 特任准教授)
(発令年月日 平成31年2月1日)
統合基礎講座 生理学統合生理学分野 准教授
鈴木 喜郎 (前 総合研究大学院大学生理学専攻 助教)
(発令年月日 平成31年3月1日)

- 医学部 内科学講座神経内科・老年科分野 教授
前田 哲也 (現 同分野 特任准教授)
薬学部 生物薬学講座生体防御学分野 特任教授
白石 博久 (現 同分野 准教授)
薬学部 臨床薬学講座地域医療薬学分野 特任教授
松浦 誠 (現 同分野 准教授)
(発令年月日 平成31年4月1日)
5. 職員の人事について
事務局長 高橋 真 (現 企画部長)
(発令年月日 平成31年4月1日)
 6. 組織規程の一部改正について
9月の病院移転等を見据え、現在の事務局5部体制から3部体制への変更、教務課及び医事課等、課の統廃合等、事務局改編に伴う組織規程の一部改正を承認
(施行年月日 平成31年4月1日及び同年7月1日)
 7. 岩手看護短期大学専攻科の学生募集停止報告及び廃止届の提出について
 8. 岩手医科大学医療専門学校の学則変更について
歯科衛生士教育コア・カリキュラムの2018年改訂に伴う臨床実習時間等の見直し及び現状に即した自由科目の削除のため、学則の一部改正を承認
(施行年月日 平成31年4月1日)
 9. 矢中新附属病院・内丸メディカルセンターの診療体制について
 10. 矢中新病院に係る新規購入機器の選定について
 11. 検体検査部門に係る運営提案及び発注スキームについて

《岩手医科大学報編集委員》

小川 彰 佐藤真結美
影山 雄太 菊池 初子
松政 正俊 工藤 正樹
齋野 朝幸 熊谷 佑子
藤本 康之 安保 淳一
白石 博久 佐々木 忠司
成田 欣弥 畠山 正充
遊田由希子 藤村 尚子
佐藤 仁 武藤千恵子
小坂 未来 高橋 慶
藤澤 美穂

編集後記

2017年3月号で担当した本稿では、1時間半に及んだ卒業証書・学位記授与や、翌月に控えた創立120周年記念式典に触れました。あれから2年、今年度の卒業式では呼名と起立のみで授与時間の短縮が図られましたが、緊張の解けた閉式後に行われた、卒業生の笑顔溢れる和やかな授与式もまた印象的でした。改元、矢中新病院の開院、とビッグイベントが続きます来年度。大学報への皆様の寄稿をお待ちしています。

(編集委員 白石 博久)

岩手医科大学報 第510号

発行年月日 平成31年3月31日
発行 学校法人岩手医科大学
編集委員長 小川 彰
編集 岩手医科大学報編集委員会
事務局 企画部 企画調整課
盛岡市内丸19-1
TEL. 019-651-5111 (内線7023)
FAX. 019-624-1231
E-mail: kikaku@j.iwate-med.ac.jp
印刷 河北印刷株式会社
盛岡市本町通2-8-7
TEL. 019-623-4256
E-mail: office@kahoku-ipm.jp

岩手医科大学附属 花巻温泉病院の歩み

平成31年3月31日をもって岩手医科大学附属花巻温泉病院は閉院します。

同院は厚生省の国立病院・療養所の再編計画に伴い、平成5年に本法人に経営移譲されました。本学附属花巻温泉病院として開院後は内科、消化器内科、外科、整形外科、リハビリテーション科、リウマチ科、神経内科・老年科を設置し、岩手県高度救命救急センターの後送病院としての機能や充実したリハビリテーション機能を備え、救急医療及び地域医療を支えてきました。本稿では本学附属花巻温泉病院の歩みを紹介します。



岩手医科大学附属花巻温泉病院は、泉温が75度、泉質が弱アルカリ性、PH8.1の源泉を利用した温水プールや、180㎡超の広い機能訓練室などのリハビリ施設が充実しています。

標榜科：内科、消化器内科、外科、整形外科、リハビリテーション科、リウマチ科、神経内科・老年科
病床数：150床

沿革

昭和63年5月

厚生省より国立病院・療養所の再編成計画において、国立花巻温泉病院を国立療養所盛岡病院及び国立療養所南花巻病院と統合し、統合後の国立花巻温泉病院を廃止するという方針が示される



契約書を取り交わす
大堀前理事長と厚生省田中病院部長

平成4年6月25日

地元自治体からの国立花巻温泉病院統合後医療への強い要請により、厚生省から国立花巻温泉病院を本学に経営移譲したい旨、正式に申し入れがある



温水プール



開院式において式辞を述べる
大堀前理事長

平成4年6月29日

本法人理事会で国立花巻温泉病院の経営移譲について承認



機能訓練室

平成5年6月23日

国立花巻温泉病院の経営移譲に関する基本協定を締結

平成5年7月1日

岩手医科大学附属花巻温泉病院を開院

平成9年10月13日

リハビリテーション棟を増築し、180㎡を超える機能訓練室を整備することでリハビリテーション機能を一層強化



花巻温泉病院恒例のセタさんさ

平成29年10月24日

附属花巻温泉病院閉院の方針を報道発表



閉院に関する記者会見の様子
(右から：小川理事長、一戸花巻温泉病院院長)

平成31年3月31日

附属花巻温泉病院閉院

岩手医科大学では、附属病院を矢巾町へ移転させることで病院機能を集約し、引き続き北東北・岩手県において高度医療の提供を行っていきます。